【別紙】参考資料

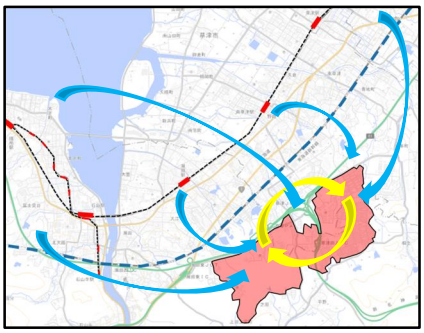
びわこ文化公園都市・交通活性化プロジェクト概要

びわこ文化公園都市は、大津市と草津市に跨り、大学をはじめとした多様な施設、都市機能が集積するエリアであり、周辺地域も含めた大津湖南エリアは全国的に人口減少が深刻化する中にあっても依然として人口の増加が見られる成長力のある地域となっている。一方で、本エリアは、慢性的な道路渋滞やそれに伴う路線バスの定時性・速達性の低下、朝夕ラッシュ時間帯等における公共交通機関の混雑、運転士不足や経営難を要因とする公共交通機関の減便、エリア内での周遊交通手段の不足など、交通課題が顕在化している。

これらの課題に対応し、びわこ文化公園都市を含む大津湖南エリアの魅力を高め、滋賀県全体を牽引する地域として持続的な発展を実現するためには、道路環境整備、公共交通ネットワークの利便性向上・最適化、新たなモビリティの導入などにより、地域特性に応じた適切な交通ネットワークを構築することで、マイカー利用から公共交通利用への利用転換を促し、道路渋滞の解消を含めて円滑な都市交通環境を実現することが必要である。

上記を踏まえ、滋賀県では令和７年度から複数年を想定して「びわこ文化公園都市・交通活性化プロジェクト」として、短期・中期・長期の施策を検討し、可能なものから順次着手・実施する。

交通活性化施策の検討イメージ



- 検討対象
  - ・エリアへのアクセス交通
  - ・施設間を移動する地域内交通

- 検討範囲
  - ・短期～中期～長期の視点で施策の検討を行う。

（施策のイメージ）

区分	取組項目イメージ	具体イメージ
短期施策	マイクロモビリティの導入・展開、など	・シェアサイクルの展開 ・電動キックボードの導入　等
中期施策	バス交通等の利便性向上、など	・バス交通の定時性・速達性向上（バス優先レーン、バス優先信号等） ・バス路線の再編・最適化、共通パスの導入 ・TDM・MM、流動コントロールによる道路渋滞解消　等
長期施策	公共交通の充実に向けた検討、など	・新モビリティ導入検討 ・新モビリティ導入を想定した道路空間整備の検討 ・運輸連合等による共同化・最適化の検討　等

交通活性化タスクフォースの設置について

施策の検討にあたっては、「びわこ文化公園都市未来創造会議」内に「交通活性化タスクフォース」を設置し、関係者等のニーズや課題意識の共有、関係者間で連携した施策推進を図る。

- 構成員：滋賀県、関係行政機関、交通事業者、エリア周辺に立地する大学等・集客施設等（次項参照）
- 開　催：令和７年度に３回程度の会議開催を予定

（参考）びわこ文化公園都市・交通活性化タスクフォース　構成員

（R7.6.24 現在）

団体名	部署・職
滋賀県	土木交通部　次長、他 （交通戦略課、道路整備課、都市計画課）
	総合企画部　新駅問題対策 ・特定プロジェクト推進室　室長、他
大津市	建設部　部長、他
草津市	都市計画部　部長、他
滋賀県警察本部	交通規制課　次席
近畿地方整備局 滋賀国道事務所	計画課　課長
滋賀医科大学	総務企画課　課長
立命館大学	BKC 地域連携課　課長
龍谷大学	瀬田事務部　課長
帝産湖南交通㈱	業務部　次長
近江鉄道㈱	自動車部バス営業課　課長
その他、立地施設等	県立美術館、県立図書館、びわこ文化公園、滋賀ダイハツアリーナ、木下カンセーアイスアリーナ、瀬田公園体育館、滋賀レイクスターズ、フォレオ一里山、東大津高校等

※構成員は施策の進捗等に応じて柔軟に変更予定

（事務局）

団体名	部署
滋賀県	土木交通部　交通戦略課
	総合企画部　新駅問題対策・特定プロジェクト推進室

びわこ文化公園都 市将来ビジョン※の概要

～未来を創造する 実証フィールド～

※令和5年3月改定

1.びわこ文化公園都市

(1)概要・経緯

- 昭和54(1979)年、大津市瀬田から草津市にかけての約520haを「びわこ文化公園都市構想区域」に位置づけました。
- 昭和57(1982)年、この構想を実現するため、基本計画に「5つのクラスター」と「緑の回廊」を位置づけました。
- 現在は、文化、芸術、医療、福祉、教育、研究、レクリエーション施設等、多様な施設が集積、緑豊かな住宅地も形成されています。

(2)特 徴

- 県内で最も人口集積が高い地域に近接しているが、瀬田丘陵の自然環境が、公園等として保全されています。
- 新名神高速道路草津田上インターチェンジに隣接し、自動車による広域的な交通アクセス性が高いエリアです。
- 公共交通のアクセスは、JR瀬田駅、草津駅、南草津駅から立地3大学行きを中心に、複数のバス路線があります。

2.びわこ文化公園都市将来ビジョン

(1)経 緯

- 平成24(2012)年、ゾーニングを基に施設整備を行ってきた「土地利用」の観点から、立地する施設・機関が相互に機能を高め合う「機能連携」の観点へ主眼をシフトし、「びわこ文化公園都市」を滋賀の社会成長・経済成長に貢献する場とすべく、「びわこ文化公園都市将来ビジョン(以下「将来ビジョン」という。)」を策定しました。
- 令和5(2023)年3月、立地施設・機関により、周辺環境の変化や10年間の取組の評価を踏まえて、将来ビジョンを改定しました。

(2)改定の背景と目的

将来ビジョン策定後の10年間の歩みを振り返り、評価・検証することで浮き彫りになった課題や、新たな社会の要請を踏まえ、滋賀県が抱える各種課題に対して、先導的に解決策を探っていく実証フィールドとして当地域を位置付け、「将来世代への責任」を果たすべく、関係主体相互の連携・協働や個々の主体の具体的な行動の指針として共有するものです。

3.改定後のビジョンの概要

目指す姿

にぎわいや美しい文化・芸術、地域の誇りとなる歴史、新たに生み出された知恵、多彩で豊かな自然環境とコミュニティを次世代へと受け継いでいくことで、「将来世代への責任」を果たす「未来を創造する実証フィールド」を目指します。

4つの検討の視点

利用・交流人口の増大 / 立地施設・機関の持つ機能の維持向上 / 新しい価値の創造・発信の促進 / 持続可能な社会の形成 追加

6つの将来像

既存の5つの将来像は維持しながら、びわこ文化公園都市を取り巻く状況、新たな社会の要請に答えて行くため、「持続可能」という視点を踏まえ、6つ目の将来像を追加

1. 県内外の人々が『交流』する場
2. 文化・芸術を『創造』する場
3. 持続可能な社会へ『挑戦』する場
4. 歴史と暮らしを『紡ぐ』場
5. いのちと健康を『支える』場
6. コミュニティを『育む』場 追加

プラットフォーム 新規設置

びわこ文化公園都市エリア共通の課題であり、各将来像と同様に「取組の方向性」を定めることで、優先的に課題解決を図る。

移動の自由

- 誰もが「行きたい場所へ」「行きたい時」に「自由に移動」できるエリア
- 新たなモビリティの導入可能性を検討するエリア

理解の共有

- 知りたい情報へ容易にアクセスでき、瞬時に情報を共有・利活用できるエリア
- ICT・データ利活用を推進し、誰もが情報を発信・共有・利活用できるエリア

取組の方向性

社会情勢や周囲の環境の変化に合わせ、柔軟に修正・変更

将来像実現に向けた短期および中長期それぞれの取組むべき方向性を明らかにし、具体的な取組を例示

短期〈実施〉

- 幅広い県民の利用や参加促進
- 安全性、快適性の向上と利活用促進
- 施設間連携による子どもや若者の学びや成長を育む
- 3大学を核とした産業振興につながる研究開発
- CO_2ネットゼロにつながる取組の実施
- 歴史資源、樹林地の保存、活用の促進
- ボランティア活動の支援 など

中長期〈検討〉

- 県内外の他の文化関係施設との連携
- CO_2ネットゼロ社会づくりにつながる取組の展開
- 食の地産地消エリア形成
- 地域の資源を次世代に受継ぐ
- 災害時の自治会、住民相互の助け合いの仕組み など

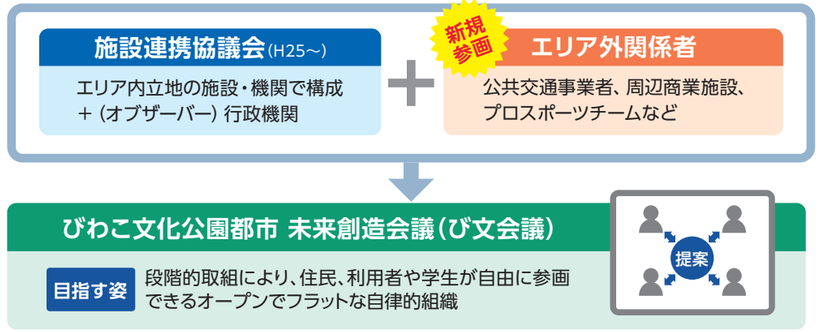
4.将来像実現のための新たな推進体制「びわこ文化公園都市未来創造会議(び文会議)」

びわこ文化公園都市におけるにぎわいの創出、活性化につながる組織運営のため、これまでのビジョン10年間を踏まえ、充実・強化を図るとともに、社会環境の進展にあわせオープンでフラットな自律的組織を目指します。

01 組織拡大

び文の発展に寄与する エリア外関係者の新規参画

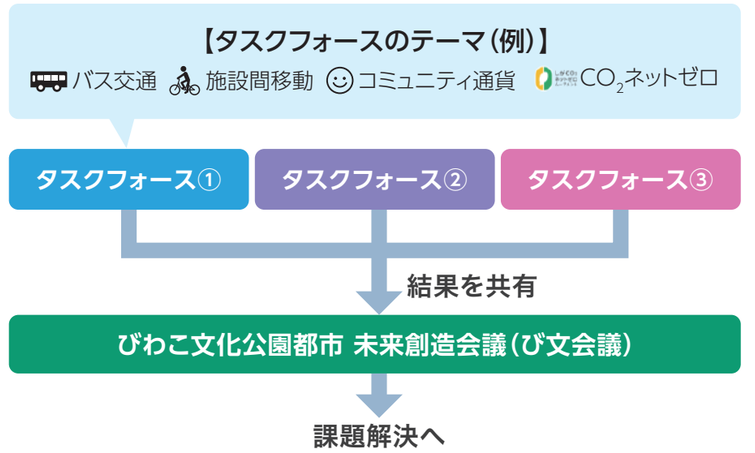
「施設連携協議会」に、公共交通事業者や周辺商業施設、プロスポーツチームなど、びわこ文化公園都市の発展に寄与する企業、団体等を構成員として迎え、さらなる機能連携、にぎわいの創出を図る。



02 機能強化

課題ごとへの対策と環境の変化に合わせた柔軟な運営

- テーマに沿った施設・機関等で構成し、課題抽出の上、各主体が自由に意見を交わし、課題解決・提案を行っていく仕組みとして「タスクフォース」を設置。タスクフォースでの結果は、「び文会議」で共有、全施設が協力・連携し、課題解決に向け対応
- タスクフォースは、関連事業実施主体、ステークホルダーが主体的に運営
- 将来ビジョンが定める「取組の方向性」を社会情勢、取り巻く環境の変化に合わせ、柔軟に修正・変更



03 PDCAサイクル

エリア内で共有できる指標の設定

- 「各施設の利用者数」など個別の指標ではなく、びわこ文化公園都市を俯瞰した視点で指標(インジケーター)を設定
- PDCAサイクルによる進捗管理により、取り巻く状況を的確に把握し、取組の見直し精度を高める。

